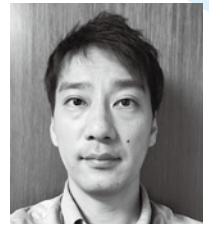


国連ハイレベル会合 Civil Society Hearing に参加して ～富士フィルムの診断薬開発の取り組み紹介と共に～

富士フィルム株式会社
メディカルシステム事業部
マネージャー 高橋 映夫



Civil Society Hearingが開催された6月4日の当日朝8時30分、マンハッタンの真ん中に位置するミッドタウンの東側、1stアベニューの44丁目にある国連の入り口は、参加するための入館証を求める人たちで既に大混雑でした。国連のスタッフ数名が、路上でパスポートと事前登録のリストと照合し一人ひとりに入館証を手渡しているのですが、長机もなく、路上に立っている国連スタッフの周りに私を含む大勢が幾重にも取り囲んでいるため、なかなかの混沌状態です。入館証をなんとか受け取り、施設の外壁沿いに長く伸びたセキュリティーチェックの列に並び、国連の会議棟に入るころにはほぼ1時間が経過していました。大学の大教室のようなカンファレンスルーム1は、既に後方に空席が残るのみでした。着席後、夕方まで続く4つのパネルセッションのコンセプト・ノートに改めて目を通し、ライチャーク国連総会議長の開会宣言とそれに続くグテーレス事務総長の演説を聞きながら、結核の専門家でない私が国連に足を運び、Civil Society Hearingに参加することになった経緯を改めて思い返していました。

参加に至った経緯

富士フィルムでは、開発途上国のリソースが十分でない環境でも検査可能な尿中の結核由来の成分を検出する迅速診断製品の開発を行っています。私は事業部の立場で市場導入戦略の立案と推進を担当しており、WHO推奨の取得後に可及的速やかにHIV高まん延国で製品を普及させるため、あらかじめ市場導入準備を進めておくことが私の課題の一つです。一般的な製品開発においては、知的財産の観点からプロジェクトの中身や進捗については上市直前のタイミングまで社外に秘匿されるのが通例ですが、グローバルヘルスの場合、WHOでの推薦やPQ（医薬品事前認定プログラム）の取得、またその後各国での薬事取得とナショナルプ

ログラムへの採用、フィールドでの啓蒙と普及拡大と、販売までのプロセスが非常に長く、各国の薬事当局のみならず、国際的に活動するステークホルダーの支援と協調抜きには物事が進んでいかない特殊性があります。

グローバルヘルスに関する知見も人脈もない中で始まった本プロジェクトですが、結核予防会をはじめとする日本の結核対策に携わる皆様から数々の人脈を御紹介いただいております。今回ニューヨークに渡ることを決めたのは、このCivil Society Hearingが結核対策に関わる海外のステークホルダーの実務担当者が集まる貴重な機会であり、彼らとの接触のチャンスとして是非活用すべきとご助言をいただいたからにはほかなりません。会いたいステークホルダーとアポが取れるだろうか、我々の話を聞いてくれるだろうか、と不安な点は色々ありましたが、あれこれ考えずに飛び込んでみようかと渡米することにしました。

Civil Society Hearingについて

本年9月に開催される国連ハイレベル会合では、WHOの掲げる結核終息とSDGsの推進のため、国家元首クラスによる政治的関与とコミットメントを引き出し、その後継続的に課題の進捗がモニタリングされながら着実に進んでいくモメンタムを得ることが期待されています。今回のCivil Society Hearingはその準備の一環として実施され、結核対策の現状やニーズについて医療従事者、研究者、学術関係者、NGO、市民団体、民間組織、患者など様々なステークホルダーが出席し、結核対策における課題を整理する場として開催されました。我々のようなプライベートセクターからの参加者はあまり多くないように見受けられましたが、冒頭でスピーチされたプレゼンターの方が、フロアに向かって「ここに参加しているあなた方一人ひとりが結核との闘いの最前線に立っておられることを忘

れないでいただきたい」と非常に力強い言葉で鼓舞されていたのが大変印象的でした。

最初のセッションでは、診断・治療から抜け漏れている40%のロストケースにアウトリーチするための議論、2つ目のセッションでは流行の終焉に必要な結核対策費のファンディングギャップを埋めるための議論が続きました。昼休憩をはさんで3つ目のセッションでは、結核の診断・治療の新たな技術に関する議論が行われ、最後のセッションでは平等、権利に基づいた人間中心アプローチにて結核対策に取り組むための社会的な課題について活発な議論がなされました。

誌面の都合上、一日かけて行われた議論をつぶさにご報告することはできませんが、私個人としましては、子供や移民、HIV陽性患者、受刑者、ホームレスなど社会的に弱い立場に置かれた人へのアウトリーチ対策の重要性、また患者に苛烈な経済負担を強いることなく結核治療にアクセスしてもらうためのユニバーサルケアの実現に向け、政治的関与と新技術の両方が必要であることが繰り返し言及されていたことが特に印象に残りました。またその中で、高感度で廉価な迅速診断ツールの必要性についても再三取り上げられ、我々が開発中の非喀痰の迅速診断について現場のニーズを確信することができたのは大きな収穫でした。もちろんこれまでも共同開発パートナーや、WHOのターゲット・プロダクト・プロファイルを通じてそのアンメットニーズについては見聞きし、頭では十分に理解したつもりでおりましたが、国際会議の場でスピーカーの方々から具体的に語られるのを聞いたのは初めてであり、よりリアリティを感じ、社会的ミッションを帯びた事業であることを改めて自覚した瞬間でした。

また、開発途上国の現場で奮闘するヘルスケアワーカーの方や元患者様からのお話を聞いたことも大変貴重でありました。結核で家族を亡くした後も、掛かった治療費の返済を続けるご家族の話は胸に迫るものがありましたし、ヘルスケアワーカーの皆さんを院内感染リスクや偏見から守り、働く動機づけを行っていくための取り組みの必要性などは、東京で事業企画を行っているだけでは聞けない話でありました。

ランチブレイクではUNAIDS(国連合同エイズ計画)がサイドイベントを開催し、HIV陽性患者に向けた結

核対策をテーマに約1時間のプレゼンテーションを実施していました。サブサンドとサラダなどを立食スタイルで提供するシンプルなものでしたが、国連のようにセキュリティーレベルの高い会場では昼食に敷地外に一旦出ると再入場に時間がかかるため、ほとんどの参加者がそのままサイドイベントに流れていたように見受けられました。また両手がサブサンドとドリンクでふさがれるため、スマートフォンでメールをチェックすることもなく大半のオーディエンスがプレゼンを集中して聞いていたと思います。このような国際会議においては、非常にアピール効果が高い手段であると思いました。私が知っている国内の学会でのランチョンセミナーとはまた異なるものであり、これも今回参加してみて初めて分かった収穫でした。

最後に

Civil Society Hearingの翌日、翌々日は、アポの取れたステークホルダーの皆様と個別のミーティングの時間が取れ、目的としたブリーフィングを実施することができました。我々の急なお願いにも関わらず、アポ取りにご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。今後、私は当社の体外診断分野のビジネスデベロップメントマネジャーとして、ジュネーブを中心に拡がるグローバル・ステークホルダーのネットワークへの情報発信と彼らとの関係構築を進め、当社が開発中の結核の迅速診断製品の市場導入準備を進めて参ります。最後になりましたが、9月の国連ハイレベル会合の準備に取り組んでおられる全ての皆様のご尽力が実を結び、今後の世界の結核対策を大きく進展させるエポックメイキングな会合になりますよう、心より祈念いたしております。🍀



Civil Society Hearing 本会場の様子